

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：17201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770301

研究課題名(和文) 生業の域内多様度とその形成過程:東南アジア大陸部におけるモン村落の事例比較

研究課題名(英文) Formation Process of the Intra-regional Variety in Subsistence Activities: A Case Study of the Hmong Hillside Villages in Continental Southeast Asia

研究代表者

中井 信介(nakai, shinsuke)

佐賀大学・農学部・准教授

研究者番号：90507500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ある地域に分布する民族における生業の多様性の存在は前提として、多様性の程度の形成過程を主題化した。事例として東南アジア大陸部における農耕民モン(Hmong)を取り上げ、彼らの生業の域内多様度とその形成過程を検討した。その結果、生業の多様化の一端として、定住化の進展と資本の蓄積、そして精米機械導入による餌資源(米ぬか)調達の効率化と家畜飼育の専門化の生起、これらの因果関係の存在が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to examine the formation process of intra-regional variety in subsistence activities from a case study of Hmong hillside villages in continental Southeast Asia. The results of this study indicate a part of the diversification process of subsistence activities. For example, specialization of pig husbandry appeared because of the use of plenty and reasonable rice bran as feeding resources. It was derived from the introduction of rice polishing machines, a progress of sedentarization and capital accumulation.

研究分野：文化人類学、人文地理学

キーワード：生業 域内多様度 定住化 専門化 モン族 タイ

1. 研究開始当初の背景

(1)

現在、世界の各国において経済発展や開発プロジェクトの進展にともなう社会の変化とともに、農山漁村の人々の生業も大きく変化しつつある。このような変化は、東南アジアにおいてはとりわけ顕著かつ急速にみられる。このような背景に基づいて、現在進行中の社会変化と関連する生業変化を解明する研究が盛んに行われているが、これらの研究にみられる近年の傾向に、生業の変化をできるだけ長期の時間経過のなかに位置づけて理解しようとする点が挙げられる(たとえば Akimichi 2009 など)。

(2)

報告者は農耕民モン(Hmong)の事例から、東南アジア大陸部における100年間程度の生業変化の解明を長期課題として研究を進めている。しかし、そもそも現在の生業の多様性がどの程度あるのかが大きな不明点としてあり、生業変化の一般性を今後検討してゆくためにも、まずは第一に現在みられるモンの生業の多様性の程度を、広い地理的範囲の中で確認する必要があると考えた。

2. 研究の目的

(1)

東南アジア大陸部における農耕民モンを事例に、彼らの生業の域内多様度とその形成過程を明らかにすることを目的とした。

(2)

農民の生業に関するこれまでの人類学的な研究では、1村落の個人・世帯レベルの詳細な資料から成り立つ研究が多く、広域あるいは特定民族の生業を議論する際も、選択された、いくつかの村落事例から結論が導かれてきた。モンをはじめ東南アジア大陸部で焼畑農耕を行ってきた少数民族を対象とした先行研究においても状況は同様である(たとえば Geddes 1976 など)。いっぽう本研究は、一定地域内の村落の事例を比較検討することから、生業の域内多様度を明らかにしようとする点に特色がある。

3. 研究の方法

(1)

フィールド調査での観察と聞き取りによる。具体的にはタイ国内のモン村落を中心に、ラオス北部のモン村落の事例もあわせて比較検討することから課題に取り組んだ。2014年度と2015年度はフィールド調査を中心に研究を実施し、2016年度は補足のフィールド調査とデータ整理および研究成果のとりまとめを行った。

4. 研究成果

(1)

本研究では、ある地域に分布する民族における生業の多様性の存在は前提として、多様性の程度の形成過程を主題化している。

本研究でフィールド調査を行ったペッチャブーン県のモン村落(KN村)の事例では、大型精米機の導入により大量に発生する米ぬかを餌に利用した、豚の大規模飼育が一部の世帯で行われていることを確認した。以下、事例内容について詳しく述べる。

(2)

KN村はピサヌローク市街から車で約1時間程度の距離に位置する。集落標高は約680mであり、周辺はなだらかな高原地帯である。KN村は1980年代半ばに成立した。

本研究では一部の世帯により大規模かつ専門的に豚飼育を行う3つの事例(A氏、B氏およびC氏)を確認した。事例では大型精米機の導入が共通の前提であり、精米機の導入とそれに伴う潤沢な米ぬかの確保、そしてその豚餌への利用が成立してはじめて大規模飼育が開始されていた。

KN村では約20年前から大規模な飼育を行う一部の世帯が出現し、豚は儀礼等に備えて各世帯で日常的に飼育しておく存在から、必要時に購入して利用する存在へ次第に変化した。この意味において、KN村ではモンの伝統的な生業の1つであった豚飼育が、一部の大規模な飼育者により専門的に行われる状況に変化したといえる。

本事例は村内において機械の導入により生産性が向上した部門が現れて専門化を進め、他はその影響により生産をやめるに至ったことを示す。これは豚の利用に伴う調達効率化の論理に沿って最適化する過程を、人の生き方の変化として確認したとみなすことができる。

(3)

まとめると、上記事例は1980年代半ばの定住化後、1990年代後半から精米機が導入されて、しだいに従来からの自給的な豚の飼育は一般に行われなくなり、2010年代半ばには飼育が一部の世帯により専門的に行われるように変化したことを示している。この事例からは、生業の多様化の一端として、定住化の進展と資本の蓄積、そして機械導入による餌資源調達の効率化と家畜飼育の専門化、これらの因果関係の存在が示唆された。

この事例は、従来の研究(たとえば中井2011、2013など)で示されてきた農耕民モンの生業像と比較して、いくつかの特異な点を示しており、モンの生業の域内多様度を考える上で、今後とも検討が必要な事例になると考えられる。

なおこの事例検討を含む成果は、日本地理学会2017年春季学術大会(2017年3月、筑波大学)において報告した。今後は、より論

点を絞って雑誌論文に仕上げる予定である。

(4)

本研究のフィールド調査を行うなかでとりわけ確認したことは、近年のモンの経済状況の変化と関連して、出稼ぎや就学などによる都市と農村間の長距離移動機会が増加していることである(この点と生業および食文化の変化の関係については、人間文化研究機構の基幹研究プロジェクト『アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開』ワークショップで、2017年1月に予備的な報告をした)。

このように「農耕民モン」の枠組みではとらえることが困難になりつつある、彼らの現在進行中の生業の変化およびこれまでの多様性の形成過程を考える上では、本研究で検討した定住化や資本の蓄積、そして機械化による生産性の向上と専門化の視点に加えて、モビリティの高まりによる活動空間拡大との関係の検討が、今後の課題として挙げられる。

<引用文献>

Akimichi, T. ed. 2009 *An Illustrated Eco-history of the Mekong River Basin*. White Lotus Press.

Geddes, W. R. 1976 *Migrants of the Mountains*. Oxford University Press.

中井信介 2011「タイ北部におけるモンの豚飼養の特性とその変化に関する覚え書」文化人類学 76(3): 330-342.

中井信介 2013「タイ北部の山村における豚の小規模飼育の継続要因」地理学評論 86(1):38-50.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

— Nakai, S. and K. Ikeya 2016 Structure and Social Composition of Hunter-gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? *Senri Ethnological Studies* 94:123-138. 査読有

— 中井信介 2016「生業の域内多様度に関する予備的考察 タイのモン村落における豚飼育の専門化事例」哲学論集 62:70-84. 査読有

[学会発表](計6件)

— 中井信介 2017「生業の専門化に関する考察 タイのモン村落における家畜飼育の事例」日本地理学会 2017年春季学術大会

(2017年3月28日、筑波大学)

— 中井信介 2017「バナナと人間：東南アジア大陸部における山地農民の自然資源利用」国立民族学博物館特別研究シンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』(2017年3月26日、国立民族学博物館)

— 中井信介 2017「焼畑農耕民の食と生態資源利用 タイにおけるモン族の都市農村間移動事例」人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト『アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開(代表者 ハイーン マレー)』ワークショップ(2017年1月30日、総合地球環境学研究所)

— Nakai, S. and K. Ikeya 2016. Structure and Social Composition of Hunter-gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? The 8th World Archaeological Congress, Doshisha University, Kyoto (2016年8月29日、同志社大学)

— 中井信介 2016「料理における生態資源利用とその移動に伴う変化 タイにおけるモンの都市部への出稼ぎ事例に関する考察」総合研究大学院大学・学融合研究プロジェクト公開セミナー『料理の環境文化史(代表者 野林厚志)』(2016年1月10日、国立民族学博物館)

— 中井信介 2015「家畜飼育の専門化に関する予備的報告 タイにおけるモン村落の事例比較」第15回熱帯家畜利用研究会(2015年3月27日、馬の博物館)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

中井 信介 (NAKAI, Shinsuke)

佐賀大学・農学部・准教授

研究者番号：90507500